様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２１年６月２０日現在

研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００６～２００８
課題番号：１８５６０６３８
研究課題名（和文）わが国のキリスト教会建築の導入過程に関する比較技術史的研究

研究課題名（英文）A historical comparative study of the introduction process and architectural technique of Christian church buildings in Japan

研究代表者
林　一馬（HAYASHI KAZUMA）
長崎総合科学大学・工学部・教授
研究者番号：８００８６４２０

研究成果の概要：標記の課題に対して、計３回の海外現地調査を含む調査研究と関連資料の調査および分析を行った。その結果、わが国のキリスト教会建築にける現存最古の遺構である大浦天主堂については、パリ外国宣教会本部の古文書館において創建当初の設計図面を新たに発見したこと、長崎の教会堂建設に大きな足跡を残した鉄川与助の遺品として近年発見された設計図面を整理・分析したことなどの具体的成果を得た。また国内外の遺構調査にもとづいて、キリスト教会建築の導入過程については、その建築的技法に関して一定の道筋を構想しうる段階に到達しえた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００６年度	1,600,000	0	1,600,000
２００７年度	1,300,000	390,000	1,690,000
２００８年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	540,000	3,940,000

研究分野：工学
科研費の分科・細目：建築学・建築史・意匠
キーワード：キリスト教会堂　建築技術　ゴシック・リヴァイバル　導入過程　設計図面

１．研究開始当初の背景

わが国の歴史においてキリスト教が伝来し、教会堂が建設された時期は２期に大別される。第１期は、戦国時代から江戸初期にかけてであるが、この時期のものは２、３の考古学的な発掘成果を除いて、建築遺構は全く残存しない。のみならず文献的あるいは絵画的な関連資料も限定されていて、実証的な建築史的研究を遂行するには極めて困難な状況にあるといえる。

これに対して第 2 期は幕末以降であるが、この時期のものは現存遺構も多く、また比較的多くの文献的あるいは古写真を含む視覚的関連資料に恵まれ、それらによってその実態をかなり詳しく知ることができる。とりわけ現在の長崎県を中心とした九州北西部地域は、わが国のキリスト教布教史において重要な位置づけを担っていたこともあって、幕末以降の動向においても現存最古の教会堂遺構である国宝・大浦天主堂をはじめとして、国内におけるキリスト教会建築の蓄積が最も濃密な分布をみせる状況となっている。

それゆえ、これらについては、全国各地における個別遺構の調査研究とともに、長崎県

地方では特に地域全体としての遺構の残存状況や建築的な実測調査等が積み重ねられ、またその成果にもとづく建築史的な研究も着実に遂行されてきたところである。

しかしながら従来の研究は、主として国内における現存遺構の個別的な実態調査およびそれらにもとづく比較検討によって、その建築形式的または構造技術的な発展ないし展開の過程を追跡することに主眼が置かれてきた。その結果、これ自体についてはすでに相応の成果を上げているのは事実であるが、しかし、そもそもキリスト教会建築が外来の様式や技術であることからすれば、それがどのようにしてわが国に導入され、移転されたのか、この過程を究明することが本来的に不可欠であると考えられる。にもかかわらず、従来の研究では、この点が殆ど未着手のまま放置されてきたのであった。

研究代表者自身は、これの必要性と重要性について早くから予見し、その際に研究対象となるであろう国内外の関連遺構や先行研究について、予備的な遺構調査と資料探索を進めてきた。この蓄積とともに、他方では近年になって、わが国への導入過程とも深く関係する東南アジア地域での現存遺構に関する本格的な調査研究が進展し、これによって本研究課題に着手しうる基盤が漸く整備されてきた、と判断されたのである。

そこで、２００６年度に本研究課題を科学研究費補助金に申請したところ、幸いにも理解が得られ、同年度に採択いただいたというわけである。

２．研究の目的

本研究の目的としては、幕末期から昭和戦前期にかけて建設されたわが国のキリスト教会建築について、その造形的ないし建築技術的な定着をもたらした特に導入期における歴史的過程を、比較技術史的および意匠史的な観点から解明し、これをもってその系譜的な体系化をめざすことを掲げた。とりわけその中心的な課題としては、当該の時代における世界的な潮流であったゴシック・リヴァイバルとの関連で、わが国の教会建築にみられる造形的あるいは構造的特性はどこに淵源し、どのような過程を経て伝来もしくは導入されたのか、そしてわが国での建設過程における土着化ないし変容の経緯はどうであったか、これらの点に関して彼我ならびに経由地たる東南アジアにおける関連遺構の比較調査と文献史料的な発掘調査にもとづいて、できるだけ実証的に究明することをめざすとした。

３．研究の方法

本研究を遂行するに当たって予定していた研究の方法とその実施状況について、以下に順次記す。

(1)国内の関連遺構に関する現地調査およびそれに関する先行研究成果の収集調査

国内における現存遺構については、過去の実績を含めると主要なものについての実態調査はほぼ終えることができた。また、これらに関する文献資料や既往の調査報告書並びに研究成果等についても、本研究の過程でほぼ同様に収集し調査することができた。

しかしながらその結果として、現存はしないが十分に考慮すべき建造物があったことが判明してきたのも事実である。たとえば戦災で失われたが、長崎の教会群と同様にパリ外国宣教会のもとに建造された奄美大島の名瀬聖心教会がそれである。しかしこれについては、現時点では関連資料を十分に収集するに至っておらず、したがって詳細な実態は不明なままとなっている。よって今後とも、こうした点を継続して調査していく必要があるといえる。

(2)国内外における関連原資料の発掘調査

本研究を推進していくためには、従来未知であった関連資料、それもできるだけ原資料を新たに見出すことは、極めて重要な作業となる。よって本研究の方法としても、そのことを当初から掲げていたところであった。

その第一は、幕末以降のわが国におけるカトリック系の布教を担ったパリ外国宣教会に関わるものと予め想定していたので、現在も引き続きフランスのパリに置かれているその本部を訪ね、そこでの資料発掘を試みた。その結果、本部内に設置された古文書局において、わが国で現存最古の遺構である国宝・大浦天主堂の創建時に関わる設計図面３葉を新しく発見することができた。この内容については、下の研究成果の項で詳説するが、この発見自体が大きな収穫だったと考えている。

第二は、国内に残存する原資料の発掘である。この点については、長崎県地方を中心とした地域における教会堂建設に絶大な足跡を残した大工棟梁・鉄川与助に関して、近年偶然に設計図面を含む遺品が発見されたとの情報を直前に入手していたので、これの分析に取り組むことにした。その概要については、下の研究成果の項で述べることにする。

(3)国外における関連遺構の現地調査

この研究方法による対象地域としては、当初から大別してゴシック・リヴァイバルの発生地であるヨーロッパのフランスとイギリス、およびパリ外国宣教会を中心としたわが国への再布教の経由地もしくは先行地である東南アジア地域の関係諸国を想定していた。しかしこの点に関しては、本務先の公務（学長職就任）の都合上から長期の出張調査をすることができなくなり、前者についてはパリ市内と周辺部の１回、後者についてはヴ

ェトナム国１回と中国・上海市１回を実施できたにすぎない。これは当初予定していた分量からすると、約半分を実現しえたのみである。このため、この研究方法による成果はまだ十分な帰結を得るに至っていないが、現時点での見通しとして下の研究成果の項で要約することにする。

(4)日本人工匠や建築家の情報入手に関する新資料の発掘調査

明治後期になると、パリ外国宣教会から派遣された神父たちに代わって、日本人工匠や建築家たちが独自に教会建築の設計を手掛けるようになること、この趨勢については従来からも指摘されてきたところである。それゆえ、彼らがヨーロッパをはじめとする諸外国の動向や先行事例などをどのように見聞したのか、または情報として入手していたのか、この点に関する新資料の発掘を期したのであるが、残念ながらこれに関しては研究調査を展開することができず、結果として本研究の期間内には殆ど新事実を見出すには到らなかった。例えば、前記の鉄川与助について、彼は上海には渡航していたことが判明したのだが、いつどこでどの建物を見たのかは未だ不詳である、というようにである。

４．研究成果

本研究によって得られた主要な成果を項目別に分類整理して、以下に順次その概要を摘記しておくことにする。

(1)パリ外国宣教会本部の古文書局が所蔵する創建時大浦天主堂の設計図面の発見と、これにもとづく研究成果

長崎市の旧外国人居留地内に所在する大浦天主堂は、幕末期以降のカトリック教会としては文久元年の末（陽暦では 1862 年１月）に献堂された横浜天主堂に次いで、元治元年(1864)末に竣工したものである。しかし横浜天主堂や同時代のプロテスタント系教会などはいずれも早くに失われたため、大浦天主堂はわが国における教会堂建築としては現存最古の遺構として著名である。加えてそれは、当初居留地に出入りした外国人向けに建設されたものであったため、明治１０年以降になって漸く建設されはじめた日本人信徒のための教会堂に比べて、極めて早期の事例として残る。こうしたことから、日本の近代建築としては唯一の国宝に指定されている、極めて重要な遺構である。

創建時の大浦天主堂がその後、明治８年と同 12 年の２度にわたる増改築を経て現存の形式になったことは、筆者を含む従来の研究ですでに明らかにされている。しかし逆に、創建当初の形式については、資料不足もあって詳細はなお不明なままとなっていた。

こうした状況に対して、本研究では 2007 年１月に実施した海外調査により、パリ外国宣教会本部の古文書局に所蔵されている大浦天主堂創建時の設計図面３葉を新たに見出すことができた。その内訳は、平面図１枚、正面図１枚、右側面図１枚である。このうち正面図１枚については、すでに同古文書局が発刊する「研究・資料」シリーズの第７巻（1999 年）で紹介され、それが廣瀬敦子氏の著書『ハルブ神父の生涯』(2004 年、サンパウロ）にも転載されていたので全くの初見ではないが、他の２枚については従来、存在さえ知られるところではなかった。それのみならず、正面図がもたらす情報は、つとに知られた資料である古写真やエッチングなどと大きく相違するものではなかったのに対して、他の２枚は従来不明であった点を解明するに有力な情報を提供するものとなっている。ここに、この新発見の意義があると考えられる。

このことに関わって得られた研究成果の主要点を列記すれば、以下の通りである。

①パリ外国宣教会から派遣された神父たちが設計または設計指導したと考えられる教会堂は数多いのだが、同本部古文書局が所蔵する関係資料について作成された別冊の目録（日本関係分）で点検するかぎり、建築図面類は他にないことが判明した。すなわち神父たちが教会堂を建設した際、その図面類をパリ本部に提出することは義務付けられていたのではないこと、逆に大浦天主堂の場合は殆ど偶然に近い状態で送付されたために幸運にも残存したことが分かるのである。

②図面の用紙は大きさが一定しないが、実測寸法からするともとはＡ３版ほどの定形紙を用い、余白の不要部分を切り落としたものかと推測される。描かれた図面は比較検討の結果、３枚とも同一の縮尺で描かれていることが判明した。縮尺はやや変則的であるが、現存遺構の実測値と比較すれば、設計寸法の１尺を 4.5ｍｍ（３／２００）で表示したものと推定される。図面表現は、いずれも建物や部材の外形線をインキングした上に、部分的に着色を施して材質の概要を示している。

③平面図からは、創建当初の平面形式を確定することができた。すなわち、その会堂部の奥行きは５スパンであったこと、身廊部および側廊部における各柱間の幅と奥行きの比例関係は現存遺構と完全に一致すること、主祭壇・脇祭壇とも背面壁は半円形をなし、それらを取り囲む聖具室の外形もほぼ半円形であったこと、身廊部入口側の柱間１間の上部には当初から２階楽廊が設置されていたこと、正面中央にあった八角形の大鐘塔は単に屋根上に載せられていたのではなく、小屋裏と室内にそれを支える柱を立てていたこと、会堂部と祭室部を区画する聖体拝領台の木柵は入口から数えて５スパン目の柱位置に設置されていたことなどが新たに判明し、

ここに当初平面として確定しうるところとなった。
④２枚の立面図からは、建物の高さ方向の寸法が判明するとともに、古写真と照合することによって正面の細部装飾の形態や３本の鐘塔の形状、窓や出入り口の位置と形状、屋根勾配は上下層とも７寸勾配であったことなどが、ほぼ確実に推定しうるところとなった。中でも、下層の外壁面が図面上でも海鼠壁仕上げとして表示されていることは、それが当初からの設計仕様であったことが確定されたことになる。
　但し一方で、この図面によってもなお不明な点や、未だ実証されていない事柄があるのも事実である。例えば、内部のリブ・ヴォールト天井については何ら情報がないこと、したがってそれを指示する他の図面があったことを示唆するが、それは今に伝わっていない。また、当初の主祭壇背面の半円形をなす外壁はもしかすると木造ではなく、煉瓦造ではなかったかとの新たな推測が生じるし、中央鐘塔を支持した柱は屋根裏の梁上や床下の礎石などとして今でもその痕跡を止めていようことが予測される。それゆえ、これらについては今後、改めて現地で確認調査する必要があることになる。
　なお、この大浦天主堂創建時の設計図面の新発見は、国内においては、全国主要紙ならびにＮＨＫテレビの全国ニュースや地元各テレビ局のローカルニュースでも大々的に報道されたところで、相応のインパクトを与えた。また、これにもとづく考察概要を日本建築学会の大会で発表したところ、多くの研究者が注目する結果となった。少なくとも、わが国における現存最古の教会堂について、その創建当初の設計図面という貴重な新資料を見出しえたことは、日本のキリスト教会建築の起点を考慮する上で極めて重要な意義をもつことは疑えないであろう。
⑵鉄川与助の教会堂関係設計図面に関する研究成果
　鉄川与助(1879～1976)が、長崎県地方を中心とする日本近代のキリスト教会堂建設において甚大な足跡を残した大工棟梁であることは、既往の研究によって今日では周知のところとなっている。しかし彼が施工者としてだけでなく、設計者としてどのように仕事をなしたかは、資料不足もあって殆ど明らかにされていない。
　ところが、近年になって、彼の生家を解体するに際してその床の間の天袋から発見された遺品が、新上五島町の鯨賓館ミュージアムに寄託された。その中に、教会堂関係の設計図面約２０枚が含まれていた。しかしそれは雨漏りのためか殆どが破損し、変色または染みがつくなど極めて保存状態が悪いこともあって、ほぼ完全な１枚を公開展示するほかは未整理のまま収蔵庫内に眠っているのが実態であった。そこでこの全容を明らかにすべく、描かれた図面内容にもとづいて分類整理をし、同時にその性格等について分析と考察を加えた。その結果、解明しえた成果の概要を以下に記す。
①約２０枚の図面のうち、現存する遺構や遺物と比較するならば、実施設計の図面かそれに近いと認められるものは江上教会の祭壇設計図２枚のみで、他は現存遺構と直接に結びつかない教会堂の計画案や、設計の検討過程における素案や下書きといった性格のものであることが推定された。いわば不要となった断片であるがゆえに、生家の天袋に無雑作に入れられたままになっていたかと考えられる。
　しかしこのことは逆に、現存遺構の設計図面は他に残存している可能性を窺わせる。この点について探査を進めた結果、今までに知りえた情報では長崎市の子孫宅に細石流教会堂（現存せず）のものが１枚、横浜市の子孫宅に青砂ケ浦天主堂設計図１枚、大江天主堂設計図２枚、呼子教会改修図３枚、水俣公教会ほかが１０枚ほど残されていることが判明した。しかしながらこれを知りえたのはつい最近のことなので、その実態については未調査である。加えて、これにもかかわらず鉄川の重要作品の大半は図面が未発見であることにもなる。今後の継続した調査を期さねばならないところである。
②鉄川が使用した用紙は、Ａ２版よりやや大きめのサイズの厚手洋紙で、「寸拾割」または「吋拾割」との欄外付記がある（これがない場合でも、実態は同様である）印刷された方眼紙であった。こうした方眼紙は現在までのところ建築関係の図面はもちろんのこと、他でも全く見たことがなく、鉄川が一体どこで入手したのか、そして元来はどの方面で使用されていたものかは現在のところ何の手掛かりも得られていない。よってこの点は、今後の研究課題となる。
　なお、鉄川が設計・施工に当たってインチを尺度として用いたとは想像しがたいから、この方眼紙を鉄川自身が特注したとはまず考えられない。また、鉄川は「吋拾割」の用紙を使う場合でも、本当にインチによる設計をしていたのではなく、単に吋を寸に読み替えて（したがって縮尺は少し変則的となるが）作図していたにすぎないことが分かる。
③鉄川はこの用紙を用いて、そこに 1/50 の一般図から 1/20、1/5 に到る詳細図まで、自在に縮尺を駆使して描き分けていた。特に注目されるのはその詳細図で、そこには壁面の煉瓦積みや石材の割付、窓桟の割付、トリフォリウムの立面構成、リブ・アーチや柱頭の形態といったものが描かれている。また、祭壇設計図では立面図・断面図とも 1/5 で作図

し、そこには各部分の装飾的な細部まで描き込まれている。すなわちこの段階では、大工棟梁が自ら設計施工した教会堂建設においても、こうした詳細設計にまで及ぶほどに設計技術はすでに細密化し、それが定着していたことが判明するということである。前述した大浦天主堂の時代から僅か４０～５０年ほどのあいだに、である。換言すれば、わが国におけるキリスト教会建築の導入過程では、専門的な建築教育を受けた建築家だけでなく、たたき上げの大工棟梁の場合でも、これほどに急速な技術的進展を遂げていたことが裏付けられるということにほかならない。

(3)国外の遺構調査にもとづく研究成果

研究方法の項に記したように、本研究課題ではわが国のキリスト教会建築の源流と目されるヨーロッパ地域と、先行または同時代的な展開地域であった東南アジア地域における関連遺構の事例調査と、これを踏まえた比較検討を行うことを掲げていた。しかしながらこの点に関しては、先にも触れたように公務上の時間的な制約のため、ヨーロッパではフランスのパリ市とその周辺部、東南アジアではヴェトナム国、中国の上海市を各１回実施するにとどまった。

これは当初の予定からすれば、約半分を実行しえたにすぎず、したがって明白で十分実証的な帰結をともなう研究成果を得たとは、正直言いがいたい状況である。よって以下に記すのは、あくまで現時点での検分結果の報告と、そこからする推察的な道筋の概要にとどまることを、お断りしておかねばならない。

①パリ市およびその周辺地域における１９世紀から２０世紀初頭にかけての、とくにゴシック・リヴァイバルによる教会堂は、遺構例からすると大きく三つのタイプに分けて考えることができる。すなわち、その１は純然たる石造による様式的な再現をめざしたもので、この代表例はパリのサント・クロチルド教会堂(1847―57)である。その２は、外観は石造または煉瓦造のままだが、内部の列柱やリブ・ヴォールト架構を細身の鉄に置き換えて近代的な造形を実現したもので、これの代表例はパリのサン・テュジェーヌ教会堂(1854－55)やサントーギュスタン教会堂(1860―71)である。そしてその３は、初期的な鉄筋コンクリート造によるもので、代表例はパリのサン・ジャン・ド・モンマルトル教会堂(1897－1904)、というようにである。しかもこれら三つのタイプは、年代順に展開したとみられる。

このうちまず三番目のタイプは、他国に類例が殆どないことからして、フランスに独自のものといえよう。次に一番目と二番目の二種は、ヨーロッパの他国においてもほぼ同様な事例が見出されるところだが、既往の研究から知られる遺構例からすると、いずれもその源流はイギリスにあり、それがいち早く伝播したものだと推測される。しかしながらそうした中で、わが国のように列柱とリブ・ヴォールト天井そのものを木造に置き換えた事例が、果たして同時期のヨーロッパ各地において先行的かつ普遍的に実現されていたかどうか、これは現在までのところ確たる実例をもって示すことができない。少なくともパリ外国宣教会から派遣されたフランス人神父たちが、最も日常的に見聞したであろうパリ市とその周辺部においては、である。もっとも上記のサント・クロチルド教会堂では、正面入口上の楽廊とパイプオルガン台において、木製のリブを用い、リブ間を板張りにした木造のゴシックを実現している、といった僅少例はあったにせよである。

②ヴェトナムでのフランスの支配は、1860 年のサイゴン（現ホーチミン市）占領に始まるから、キリスト教の布教もわが国と同時代的な現象であった。しかしこと教会堂建築に関しては、参照すべき歴史的遺構はごく限られるのが現状のようである。最も古い教会堂関連遺構としてはハノイ大聖堂礼拝室(1876)があるが、これはヴェトナムの伝統的寺院か民家のような躯体の周囲にヴェランダ風の列柱を巡らせた古拙な植民地様式というべきもので、その大壁造の壁体に尖頭アーチの開口部を穿つ点がわずかにゴシック風となっているにすぎない。

他方、本格的な教会堂としては、サイゴン大聖堂(1877―80)とハノイ大聖堂(1884―88)の二つを上げることができる。どちらも煉瓦造（後者はモルタル塗り）で、正面に双塔を立て、中央にバラ窓をおく点で、パリのノートルダム大聖堂を範としたような典型的なゴシック様式である。ただし前者のアーチはすべて半円である点が異なる。

この２棟で興味深いのは、内部の列柱や壁面はすべて煉瓦造（後者では天井の横断アーチも同様）であるにもかかわらず、天井面のみは木製のリブ・アーチ（前者は４分割、後者は８分割）で区画し、そのリブ間は漆喰塗り仕上げとしている点である。前者の側廊部では稜線にリブを付けずに４分割された曲面としていることからすると、はたしてリブ間の曲面が張り天井かどうかは疑われなくもないのだが、しかしともあれここに、少なくとも形態的には木製のリブ・ヴォールト天井が達成されていたことは確認できる。特に前者はパリ在住の建築家ジュール・ブラールの設計になるので、この時代にはすでに木製リブ・ヴォールト天井の工法は、本国でも知識としては成立していたと見なければならない。

③中国の上海市は 1842 年の南京条約で開港された都市だけに、多くの重要な教会堂遺構

を見ることが出来る。その中で最古の遺構は聖フランシスコ・ザビエル教会堂（薫家渡天主堂、1853）であるが、これは純然たる石造でイルジェス教会型のファサードをもつ。設計者もスペイン出身のイエズス会修道士で教会建築担当だったジャン・フェランドというから、これは旧来の延長と見てよいであろう。一方、ゴシック・リヴァイバル系のものとしては、聖ヨセフ教会堂（天主教若瑟堂、1860－61）、聖三一教会（現・黄浦区人民政府大礼堂、1866―69）、除家匯天主堂(1910―11)、西郊の余山天主堂(1925)などが知られる。これらはいずれも煉瓦造による大規模な遺構であるが、聖三一教会はイギリス本国におけるゴシック・リヴァイバルの旗手であったジョージ・ギルバート・スコットの設計で、上海在住の建築家ウィリアム・ギドナーが担当というように、本格的なものが多い。しかしこれらには、一部に内部立入り禁止で未確認のものもあるが、どうも木製のリブ・ヴォールト天井は採用されていないようである。④以上のような現地調査の結果から確定的な結論を導き出すことはもちろんできないが、しかし少なくとも次のような点を確認することは許されるであろう。

その１は、現在までのところ、全面的な木製のリブ・ヴォールト天井の使用は大浦天主堂のものが東アジア地区におけるおそらく現存最古の事例であること、その２は大浦天主堂よりも１０年ほど先に、パリでは鉄製の列柱とリブ・ヴォールト天井が達成されていた（イギリスではさらに５０年ほど遡りうる）から、木製のそれは鉄から木へと変換されたという筋道は一応考慮しうるのではないか、ということである。

もちろん、イギリスには細身の木製束柱を内部の列柱に用い、木製リブと漆喰塗りの曲面からなるリブ・ヴォールト天井とした実例は、フランシス・ヒオーンが設計したグロスターシャーのテトベリー教会堂(1777－81 再建)という極めて早期のゴシック・リヴァイバルとして知られるところであるから、木製のそれをわが国での創見とすることはできない。しかしながら他方で、ヨーロッパ地域における木製リブ・ヴォールト天井の普及がそれほど一般的でない状況からすると、上の推考にも一応の可能性があるのではないかと考えられる。

少なくともわが国における教会堂建築では、ゴシック・リヴァイバルの系譜に属する造形を選択した場合、外壁が木造か煉瓦造の違いがあっても、内部はすべて純然たる木造で構築されていることに例外はなかった。すなわちここに、わが国における在来の木造による伝統的技術の水準の高さと、それを十分に考慮に入れた導入過程の特異性を確認することができるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）
①林　一馬、五島へ、そしてその彼方へ、樂、Vol.１、24－25 頁、2008、査読無
②林　一馬、鉄川与助のキリスト教会堂関係設計図面/長崎県新上五島町・鯨賓館ミュージアム所管の遺品、日本建築学会九州支部研究報告、47 号、697－700 頁、2008、査読無
③林　一馬、長崎の教会群を世界遺産に、ながさき経済、No.212、1―8 頁、2007、査読無
④林　一馬、世界遺産を目指す長崎の教会群、地域開発、Vol.551、46―47 頁、2007、査読無
⑤林　一馬、長崎市の教会群、修復の手帖、Vol.3、80－81 頁、2007、査読無

〔学会発表〕（計２件）
①　林　一馬、パリ外国宣教会所蔵の大浦天主堂設計図面/その２．立面図について、日本建築学会大会学術講演会、2008 年 9 月 18 日、広島大学
②林　一馬、パリ外国宣教会所蔵の大浦天主堂設計図面/その１．平面図について、日本建築学会大会学術講演、2007 年 8 月 29 日、福岡大学

〔図書〕（計１件）
①日本建築学会編（前田忠直、小林克弘、林一馬ほか編著）、彰国社、建築論事典、2008、総 263 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織
(1)研究代表者
林　一馬（HAYASHI KAZUMA）
長崎総合科学大学・工学部・教授
研究者番号：８００８６４２０

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし